# 蝉丸

観世流改訂謡本

内十八

PL
765
.K362x
v.1
no.18:2

APR 20 1938
PRESENTED BY
T. Wake.

UNIVERSITY OF
ILLINOIS LIBRARY
AT URBANA-CHAMPAIGN
ASIAN

四番目
畧三番

# 蟬丸

八月

ツレ　蟬丸
シテ　逆髪
ワキ　臣下

次第

（三人）定なき世のなか〳〵に。定なき世のなか〳〵に憂き事や頼なるらん　これハ延喜第四の皇子。蟬丸の宮にておハします（三人）げにや何事も報ありける浮世かな。前世の戒行いみじくて。今皇子とハ生れ給へども。襁褓のうちよりなど



ASX
PL 765 .K362x v.1 no.18:2

やらん。両眼盲ひましくて。蒼天よ
月日の光なく。闇夜に燈火暗うして。
五更の雨も。やむ事なし明し暮さ
せ給ふ所に。帝いかなる叡慮やらん。
（三人）密に具足し奉り。逢坂山に捨て置
き申し。御髪をおろし奉れとの。綸言
出でらるへからねば。御痛はしき限なけ

れども。勅諚なれバ力なく　下歌　足弱車
忍路を雲居のよそに廻らして
上歌　志のゝめの。空も名殘の都路を。空も名
殘の都路を。けふ出でそめて又いつか。
歸らんこともかた糸の。寄る邊なき
身の行くへ。さなきだに世の中ハ。浮木
の龜の年を經て。盲龜の闇路たどり

ゆく迷の雲も立ちのぼる逢坂山に、
著きにけり逢坂山につきにけり

ツレ詞 いかに清貫

ワキ 御前に候

ツレ さてわれをば此山に捨て置くべきか

ワキ さん候宣旨にて候程に（宣旨にて候程に トモ）
これまでは御供申して候へども。いづくに捨て置き申すべきやらん。

カヽル上 さるにても我が君は。延喜の聖主より此方。

國を治め民を憐む御事なるよ。かやう
の叡慮ハ何と申したる御事やらん。
かゝる思ひもよらぬ事ハ候へど。あら
愚の清貫が云ひごとやな。もとより盲
目の身と生るゝ事。前世の戒行拙き
ゆゑなり。されバ父帝も。山野に捨て
させ給ふ事。御情なきよハ似たれども。

此世にて過去の業障をはたし。後の世を濟けんその御はかりごと。これこそ眞の親の慈悲よ。あら歎くまじの教訓やな　宣旨にては程よ。御髪をおろし奉りぬ

ツレ　これは何と云ひたる事ぞて

上　これは出家とてめでたき御事にてわたらせ給ひぬ

物着

ツレ上　げによや

香鬟花髻を背き。半檀に枕をせ。居士
の西施が申しけるも。かやうの姿にて
ありけるぞや　上 此御有様にて。なら
ぬ盗人の恐もあるべければ。衣を賜
はりて蓑といふものを参らせ上げ候
ツレ上 これは雨よる田蓑の島と詠み置き
つる。蓑といふものを　又雨露の御ため

（ツレ上）これは

あれば同じく笠を参らする

御侍御笠と申せと詠み置きつる笠にて

いかものよのう　又此杖は御道しるべ。

御手に持たせ給ふべし　（ツレ上下）げによく

これもつくからに千歳の坂をも越え

なんと、かの遍昭が詠みし杖ぞ　それは

千歳の栄行く杖　（ツレ）これは處も逢坂

山の閑の戸ざしの藁屋の竹の
杖柱とも頼みつる父帝ハ捨て
られて、地上下かゝる浮世に逢坂の。知るも
知らぬもこれ見よや。延喜の皇子の
なり行くはてぞ悲しき。行人征馬の
数々。上り下りの旅衣。袖を志ほりて村
雨のふり捨てがたき名残かなふり捨て

まだき名残。惜さりとてはいつを限りに
有明のつきぬ涙を押へて。はや帰る
さよなりぬれぞ。皇子は後に唯ひとり。
御身に添ふものとては。琵琶を抱き
て杖を持ち。臥しまろびてぞ泣き給ふ
臥しまろびてぞ泣き給ふ。　これは
延喜第三の皇子。逆髪とは我が事

なり。われ皇子とハ生れども。いつの
因果の故やらん。心より〳〵狂乱して。
辺土遠境の狂人となつて。緑の髪ハ
空さまに生ひのぼつて撫づれども下
らず。いかにあれなる童どもハ何を笑
ふぞ。何我が髪の逆さまなるがをかしい
とや。げに逆さまなる事ハをかしいよな。

さてハ我が髪よりも。汝等が身にて
われを笑ふこそさかさまなれ。面白し
面白し。これらハ皆人間目前の境界
なり。それ花の種ハ地に埋もつて千林
の梢にのぼり。月の影ハ天にかゝつて
萬水の底に沈む。これらをそれ皆何れか
順と見逆なりといはん。われハ皇子なれ

ども。庶人にくだり。髪ハ身上より生ひ
のぼつて星霜を戴く。これ皆順逆
の二つなり。おもしろや柳の髪
をも風ハ梳るよ　地 風にも解かれぬぞ
シテ 手にも分けられぬぞ　地上 かなぐりすつるみ
ての袂　シテ 抜頭の舞やあさまし
地上歌 花の都を立ち出でゝ。花の都を立ち

●仕舞 独吟

出でゝ。憂き音よなくら鴨川や。末白河
をうち渡り。粟田口よも著きしかば
今ハ誰をか松坂や。関のとなたと思ひ
しよ後よなるや音羽山の名残惜しの
都や。松虫鈴虫きりぎりすの。鳴くや夕
陰の山科の里人もとがむなよ。狂女なれ
ど心ハ清瀧川と知るべし逢坂の。

地「今や行く

関の清水に影見えて

らん望月の。駒の歩みも近づくか。水も

走井の影見れば。われながらあさま

しや。髪はおどろを戴き黛も乱れ

黒みて。げに逆髪の影うつる。水を

鏡と夕波の。うつゝなの我が姿や・

ツレサシ上「第一第二の絃は索々として秋の風。

松を拂つて疎韻落つ。第三第四の
宮ハ。われ蟬丸が調も四つの。をりから
ありける村雨かな。あら心凄の夜すがら
やな。世の中ハとてもかくてもありぬべし。
宮も藁屋もはてしなければ　シテ上　不思
議やなこれなる藁屋の内よりも。撥
音氣高き琵琶の音聞ゆ。そもこれ

ほどの賤が屋よも。かゝる調のありける
よそ。思ひよられて何とやらん。世よなつ
かしき心ちして。藁屋の雨の足音も
せで。ひそかよ立ちより聞き居たり
ツレ上
誰そやこの藁屋の外面よ音するハ。
此程をりをり訪はれつる。博雅の三位
にてましますまてら
シテ打
近づき聲をよく

よく聞けば弟の宮の聲なりけり。

のう逆髪こそ来りたれ。蝉丸は内よ

ましまさう ツレ 何逆髪ぞ姉宮かと。

驚き藁屋の戸をあくれば、 シテ さも

あさましき御有様 ツレ 互に手に手を

取りかはし シテ 弟の宮か ツレ 姉宮かと

地 共に御名を木綿付の。鳥も音をなく

逢坂のせきあへぬ涙。たがひよ袖や
志ぼるらん　それ栴檀ハ二葉より
香ばしとえり。ましてや一樹の宿り
そして。風だにもずるの香をとめて。花も
連なる。枝さかや　●遠くハ浄蔵
浄眼早離速離。遠くハ又應神天皇
のみ子　難波の皇子菟道の皇

子と。互に謙譲の御志。皆これ
連理の情とかや　さりながらこれは兄
弟の宿りとも　思はざりしは藁屋
の内の。一曲奏でかくぞとも知らで調の
四つの緒よ　ひかれてこそよ。寄る辺
の水の　浅からざりし。契かな

クセ

世は末世に及ぶとても。日月は地に墜

ちぬ。慣ときて思ひしよ。われらいらな
れぞ。皇子を出でゝかくぞあり。人臣に
だに交らで。雲居の空をも迷ひ来て
都鄙遠境の狂人と。路頭山林の賤と
なつて。邊土旅人の憐みをたのむ
ぞかりあり。たさるまでもきのふまでは。
玉樓金殿の。床を磨きて玉衣の。袖

ひき替へてけふハ又かゝる處の臥所とて。
竹の柱に竹の垣軒も樞も疎らなる。
藁屋の床に藁の窓。敷く物とても
藁筵これぞ古への錦の褥なるべし
ツレ上 たま〳〵こと訪ふものとてハ 地 嶺に
木傳ふ猿の聲。袖をうるほす村雨の。
音にたぐへて琵琶の音を。弾きなら

し彈きならし。我音ともなく涙の。

雨だにも音せぬ藁屋の軒のひまび

まに。時ゞ月ハもりながら月に見る事

のかなはねバ月にもうとく雨をだに。

聞かぬ藁屋の起臥を思ひやられて

シテロンギ上

痛ハしや。これまでなりやいつま

でも。名殘ハ更に盡きまてまじ。暇申

して蟬丸。一樹の蔭の宿りとて。
それだにあるましてげに兄弟の
宮の御別れとまるを思ひやり給へ
げに痛はしやわれながら行くを慰む
方もあり。留るをこそ夕雲の。立ち
やすらひて泣き居たり　なくや関
路の夕烏。うかれ心はむばたまの　我が

黒髪の末まで行く ツレ別路をとめよ

逢坂の シテ関の杉むら過ぎ行けば

ツレ人声遠くなるまゝに シテ藁屋の

軒に ツレ佇みて 地互にさらばよ常

には訪ひ給へと。かすかなる声の

ほど聞き送り見返り見置きて泣く

泣く別れしおもとはまゝ泣く泣く別れ

おちしまて
ゝゝゝこり

文學博士 井上頼圀 本文監修

丸岡桂 本文訂正

観世清之 節附訂正

## 稽古摘要

| | |
|---|---|
| 習ひたる師匠 | |
| 始めたる年月日 | 大正　年　月　日 |
| 終りたる年月日 | 大正　年　月　日 |
| 稽古 | |
| 感想 | |

### 使用家の持權

観世流改訂謡本の稽古本使用家は、其内組百十番百十冊、又は外組六十二番六十二冊、又は別能組二十八番二十八冊の各一組、或は三組を悉く買ひ揃へられ候節、返送料を添へて發行所へ送附せられれば、發行所は無料にて五番綴の美本に仕立直し御返送可申上候。かくして使用家は期せずして一揃の五番綴謡本を得らるべく候

大正七年三月二十日印刷
大正七年三月三十日發行

大正版 一番綴

著作權所有

發行者 東京市神田區今川小路三丁目九番地 土居源太郎

印刷者 東京市神田區佐久間町一丁目一番地 七條愷

印刷所 東京市神田區佐久間町一丁目一番地 七條式金屬版印刷所

發行所 東京市神田區今川小路三丁目九番地
電話本局三六〇九、振替東京一三四七五
観世流改訂本刊行會

UNIVERSITY OF ILLINOIS-URBANA
3 0112 099056373